

平成27年度

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター
業務実績評価書（案）

I 全体評価

1 総 評

全体として年度計画を順調に実施しており、概ね着実な業務の進捗状況にある。

- ・ 平成27年度は、第二期中期目標期間の3年目となる折り返しの年であり、単年度計画に対する実績という点でも、また第二期中期計画全体の進捗という点でも、着実に成果を上げていると評価できる。
- ・ 病院事業については、3つの重点医療（血管病、高齢者がん、認知症）において、最新の機器と高度な技術を活用した難易度の高い鑑別診断や低侵襲な治療の提供に努めた。また、救急医療から在宅医療に至るまで、地域の医療機関等との連携に基づき、高齢者が地域で安心して生活できるよう、医療体制を強化した。
- ・ 中でも、二次救急医療機関及び東京都地域救急医療センターとして、地域の医療機関とも協力・連携しながら、救急患者の受入体制を強化し、平成26年度に続き救急医療の実績を伸ばしたことは大いに評価できる。
- ・ 研究事業については、これまで蓄積した糖鎖の研究から、複数の指定難病の発症原因を解明するなど、画期的な成果が得られ、今後の臨床応用や実用化が大いに期待できる。また、高齢者が安心して生活するための社会環境づくりに関して、様々な視点から研究に取り組み、成果を還元している。

2 都民に提供するサービス及びその他の業務の質の向上に関する事項

<高齢者の特性に配慮した医療の確立と提供、地域連携の推進>

- ・ 血管病医療について、最新機器の活用と高度な技術により、低侵襲で効果的な治療を着実に実施するとともに、植込型補助人工心臓の施設基準を取得するなど、引き続き高度かつ多様な治療を提供する体制を整備した。

- ・ 高齢者がんについて、内視鏡治療体制の強化を図り、低侵襲な鑑別診断や治療の実施件数を大きく伸ばすとともに、緩和ケアの充実に努め、がん診療体制の強化を図った。
- ・ 認知症医療について、最新の機器と高度な技術により、早期診断の推進及び診断精度の向上を図るとともに、都の委託により、認知症ケアに従事する医療専門職等の研修拠点として、新たに認知症支援推進センターを設置し、各種研修等を実施した。
- ・ ICU・CCUの効率的運用等により救急受入体制を強化するとともに、急性大動脈スーパーネットワークに参画するなど重症度の高い患者も含め、積極的に受け入れを行った。
- ・ これらの取組により、高齢者の急性期医療を担う病院として、その役割を果たしていることは高く評価する。

<高齢者の健康の維持・増進と活力の向上を目指す研究>

- ・ 病院と研究所が連携して研究を行い、高齢者の頻尿を皮膚刺激によって制御する「過活動膀胱抑制器具」が医療機器として承認されたほか、認知症の原因疾患の一つであるエオジン好性核内封入体病に関して、皮膚生検による判別診断の有用性について学会報告を行った。
- ・ 糖鎖構造の異常が、指定難病である福山型先天性筋ジスロトフィーや網膜色素変性症の発症の一因であることを解明したほか、膵臓がん病変部周辺の形態異常が見られない膵管組織や、悪性化が見られる前の膀胱腫瘍において、テロメア長の短縮を確認し、がん化や悪性化のリスク評価としてテロメア長の測定が有効である可能性が示された。
- ・ このほか、高齢者の世代間交流についての長期介入研究から、社会貢献活動が心身機能の維持改善にもたらす効果を明らかにし、高齢者ボランティアの支

援のためのコーディネートマニュアルを作成し、社会に還元した。

- 病院と研究所が一体化した法人であるメリットを活かし、着実に研究成果を挙げていることは高く評価できる。今後は、さらに研究成果を臨床応用につなげる取組の推進に努めてほしい。

<高齢者の医療と介護を支える専門人材の育成>

- 医療の質及びサービスの向上を図るため、職員の専門性の向上に向け、認定医や認定看護師などの資格取得の支援を行ったほか、医師事務作業補助者の人材の確保等に努めた。
- 研修医等に対する高齢者医療に関するセミナーの開催や連携大学院からの研究生の受入に加え、新たに外国人医師臨床修練の受入など、次代を担う人材の育成に貢献した。今後も、地域の医療・介護を支える人材や次代の高齢者医療・研究を担う人材の育成に取り組んでほしい。

3 法人の業務運営及び財務状況に関する事項

- 今後の病院運営について検討するワーキンググループの設置や職員表彰制度の導入など、業務運営の改善及び効率化に積極的に取り組んだ。
- 病院部門における新入院患者の確保や病床利用率の向上に向けた取組、新たな施設基準の取得等により収入の確保に努めた。
- コストの縮減に向けて、後発医薬品の採用促進や、手術室で使用する材料についてもSPD受託業者と運用方法を定め効率的な材料管理に努めるなど、様々な取組を行った。
- 今後も、経営分析を踏まえた効果的な取組やリスク管理の強化を推進してほしい。

4 その他

(中期目標・中期計画の達成に向けた課題、法人への要望など)

- ・ 平成28年度は、第二期中期目標期間の4年目となる目標達成に向けた重要な年度である。
- ・ 高齢者医療・研究の拠点として、その役割を着実に果たすとともに、第三期中期目標期間を見据え、センターの医療、研究を取り巻く状況を踏まえながら、地方独立行政法人の特性を活かして経営基盤の強化を図り、職員一丸となって目標達成に向けた一層の発展を期待する。

Ⅱ 項目別評価

項目別評価に当たっては、法人から提出された業務実績報告書の検証を踏まえ、事業の進捗状況及び成果について、年度計画の評価項目ごとに以下の5段階で評価を行った。

| | |
|--------|---|
| 評 定 | S … 年度計画を大幅に上回って実施している A … 年度計画を上回って実施している B … 年度計画を概ね順調に実施している C … 年度計画を十分に実施できていない D … 業務の大幅な見直し、改善が必要である |
|--------|---|

1 都民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためとるべき措置

(1) 高齢者の特性に配慮した医療の確立と提供

ア 三つの重点医療の提供体制の充実

センターが重点医療として掲げる血管病・高齢者がん・認知症について、研究所と連携しながら、高齢者の特性に配慮した低侵襲な医療の提供及び患者が安心できる医療体制を推進する。

| 項目 | 年 度 計 画 |
|----|--|
| 1 | <p>ア 三つの重点医療の提供体制の充実</p> <p>(ア) 血管病医療</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 造影装置を使用しながら低侵襲外科手術が行えるハイブリッド手術室や心臓の検査・治療専用の血管造影室などの活用により、関連診療科が連携して高齢者の血管病に係る検査及び治療を提供する。 ○ 腹部並びに胸部大動脈インターベンション治療（ステントグラフト治療）など、低侵襲かつ効果的な治療を提供する。また、TEVAR（胸部ステントグラフト内挿術）の指導医の資格を取得し、緊急 TEVAR の施行可能な体制を構築する。 <ul style="list-style-type: none"> ■平成 27 年度目標値 大動脈瘤手術件数 18 件 <li style="padding-left: 40px;">ステントグラフト内挿術（胸部）実施件数 10 件 ○ 経カテーテル的大動脈弁置換術（TAVI/TAVR）の施設認定を取得する。また、植込型補助人工心臓治療の施設基準の取得を目指し、要件とされる人材及び手術件数の確保に取り組む。 <ul style="list-style-type: none"> ■平成 27 年度目標値 <li style="padding-left: 40px;">心臓大血管外科手術（開心術）件数 100 件（植込型補助人工心臓治療施設基準） ○ 閉塞性動脈硬化症の重症患者に対して、先進医療である末梢血単核球細胞移植療法の実施体制を維持し、カテーテル治療やバイパス手術、内服薬治療を含めて、個々の患者に適した治療を提供する。 ○ 東京都脳卒中救急搬送体制における t-PA 治療可能施設として、病院独自の脳卒中ホットラインを活用し、t-PA 治療及び緊急開頭術、血管内治療術など、超急性期脳卒中患者治療を積極的に行う。 <ul style="list-style-type: none"> ■平成 27 年度目標値 t-PA 治療実施件数 25 件 <li style="padding-left: 40px;">脳卒中ホットライン受入数 80 件 ○ 脳血管障害に対するより低侵襲で効果的な血管内治療（脳動脈瘤に対するコイル塞栓術、急性期脳動脈閉塞に対する血栓回収術、内頸動脈狭窄症に対するステント留置術など）を推進する。 <ul style="list-style-type: none"> ■平成 27 年度目標値 血管内治療実施件数 <li style="padding-left: 40px;">コイル塞栓術件数（脳動脈瘤） 8 件 <li style="padding-left: 40px;">ステント留置術（内頸動脈狭窄症） 22 件 ○ 入院患者の状態に応じて心臓リハビリテーションなどの疾患別リハビリテーションを早期に実施するとともに、廃用萎縮防止ラウンドを実施するなど、病院全体の廃用萎縮防止を推進する。 ○ 糖尿病透析予防外来やフットケア外来を拡充するとともに、CGM（持続ブドウ糖モニター）を用いた治療を推進する。 ○ 研究部門との連携により、重症心不全疾患における心筋再生医療の実現に向けた幹細胞移植医療研究を継続して行う。 |

評 定 : A (年度計画を上回って実施している)

- ハイブリット手術室を活用し、腹部並びに胸部大動脈瘤に対するステントグラフト内挿術など、低侵襲で効果的な治療を着実に実施した。
 - TEVAR (胸部ステントグラフト内挿術) の指導医資格の取得や植込型補助人工心臓の施設基準の取得など、高度かつ多様な治療を提供する体制整備を推進した。
 - 東京都脳卒中救急搬送体制に参画し、病院独自の脳卒中ホットラインを活用して、t-PA治療や血管内治療など、超急性期及び急性期の脳卒中治療を積極的に行った。
- ⇒ 血管病医療について、最新機器を活用した治療の提供に加え、新たな指導医資格及び施設基準の取得、患者の迅速な受入体制を整備するなど、より多くの患者に対して低侵襲な治療の提供に努めたことは高く評価できる。

評 定 : A (年度計画を上回って実施している)

- コンベックス内視鏡下穿刺術など最新機器を用いたがんの鑑別診断について、医師の増員や地域連携を行うことにより、実施件数が増加した。
 - 早期の胃がんや大腸がんに対する、内視鏡下粘膜下層剥離術（ESD）や内視鏡的粘膜切除術（EMR）の実施件数が増加するなど、低侵襲な治療を積極的に実施した。
 - 膵がんによる閉塞性黄疸や困難な症例に対しても、内視鏡的逆行性胆道膵管造影術（ERCP）を確実に実施した。
 - 多職種で構成する緩和ケアチームの活動強化や外来の診察時間を増やす等の取組により、緩和ケアを充実させた。
- ⇒ 高齢者がん医療について、低侵襲ながんの鑑別診断、治療を推進したほか、緩和ケアの充実に努めるなどがん診療体制の強化を図ったことは高く評価できる。

| 項目 | 年 度 計 画 |
|----|--|
| 3 | <p>ア 三つの重点医療の提供体制の充実</p> <p>(ウ) 認知症医療</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 認知症診断 PET (PIB-PET) を推進するとともに、関連診療科と研究所が共同で症例検討を行うことで、認知症の診断向上に努める。 <ul style="list-style-type: none"> ■平成 27 年度目標値 認知症関連 MRI 実施件数 1,600 件 脳血流 SPECT 実施件数 950 件 ○ 認知症診断の精度を向上させることのできる FDG-PET を先進医療として提供開始する。 ○ MRI の統計解析を取り入れ、PET 及び SPECT の機能画像との比較検討を行い、その結果を日常の診療で活用することで、認知症早期診断の精度の向上に努める。 ○ 認知症診断の専門外来である「もの忘れ外来」において、精神科・神経内科・研究所医師が連携して診療を行う。また、認知症に関する研修を受講した看護師をリンクナースとして配置し、全病棟の認知症患者対応力の向上を図る。 ○ 外来患者とその家族に対する相談会を行うとともに、家族教育プログラムや家族交流会、集団療法などのサポートプログラムを提供することにより、支援体制を充実させる。 ○ 地域医療機関等への広報活動を行い、軽度認知症例の外来通院リハビリテーションの実施を継続する。 ○ 東京都認知症疾患医療センターとして、多職種チームが各々の専門性を活かした受療相談を実施するとともに、地域連携機関の要請を受けて認知症高齢者を訪問するアウトリーチ活動を行う。 <ul style="list-style-type: none"> ■平成 27 年度目標値 専門医療相談件数 10,000 件 認知症症例についての地域との多職種症例検討会実施件数 10 件 ○ 平成 27 年度に新設する「認知症支援推進センター」において、島しょ地域の認知症対応力向上研修をはじめとした、認知症医療・介護従事者を対象とする研修事業を行う。 ○ 板橋区認知症支援連絡会への参加を継続し、板橋区の認知症支援体制構築に貢献する。 |

評 定 : A (年度計画を上回って実施している)

- MRI、SPECT、PET等の検査実施件数を着実に増加させるとともに、MRI画像の統計解析を行い、その解析結果とPET等の機能画像との比較検討により、認知症診断の精度向上に努めた。
 - 「FDGを用いたポジトロン断層撮影によるアルツハイマー病の診断」(先進医療B)の実施が先進医療技術審査部会において承認された。
 - 都の委託により新たに認知症支援推進センターを設置し、認知症ケアに従事する医療専門職等を対象に研修等を実施した。
- ⇒ 認知症医療については、最新の機器と高度な技術を活用して早期診断の推進及び診断精度の向上を図るとともに、認知症支援推進センターとして人材育成を行い、都における研修拠点の機能を果たしたことは高く評価できる。

| 項目 | 年 度 計 画 |
|----|---|
| 4 | <p>イ 急性期医療の取組（入退院支援の強化）</p> <p>高齢者の急性期医療を提供する病院として、重症度の高い患者を積極的に受け入れるとともに、退院後の生活の質（QOL）の向上を目指し、患者一人ひとりの病状や環境に応じた医療の提供と入退院支援を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 東京都CCUネットワークに引き続き参加するとともに、急性大動脈スーパーネットワーク緊急大動脈支援病院の認定を取得し、大動脈疾患急性期医療の充実を図る。 ■平成27年度目標値 急性大動脈疾患受入件数 20件 ○ 東京都脳卒中救急搬送体制のt-PA治療が可能な急性期医療機関として、病院独自の脳卒中ホットラインを活用し、急性期脳梗塞に対するt-PA治療の迅速な実施に努める。 ■平成27年度目標値 t-PA治療実施件数（再掲） 25件 ○ 特定集中治療ユニット（ICU）や冠動脈治療ユニット（CCU）を効率的かつ効果的に運用し、重症患者の受入れを積極的に行う。 ■平成27年度目標値 ICU/CCU稼働率（実動） 70% ○ 適切な入退院支援及び退院後の生活の質（QOL）を確保するため、高齢者総合評価（CGA）の考えに基づいた医療を提供する。 ■平成27年度目標値 総合評価加算算定率 90% ※総合評価加算算定率＝総合評価加算算定件数/退院患者数 ○ 入院の早い段階から患者の病状に応じた疾患別リハビリテーションを実施することで、重症化予防と早期回復・早期退院につなげる。 ○ 回復期リハビリテーションを実施している医療機関等への医師の派遣や紹介等を通じて後方連携体制を強化し、退院後も継続的に治療が受けられる環境の確保に努める。 ○ 入院が長期化する要因を分析し、病棟ごとの退院支援カンファレンスや退院支援チームによる退院困難事例への介入などにより、患者の状態に適した退院支援を積極的に行う。 ○ 退院前合同カンファレンスや地域連携クリニカルパスを活用し、退院後も継続して治療が受けられるよう、地域の医療機関や介護施設との連携を図る。 ○ 訪問看護師の受入れや訪問看護ステーションとの意見交換や研修会などを通じて、在宅医療の後方連携体制を強化する。 |

評 定 : A (年度計画を上回って実施している)

- 緊急大動脈支援病院として急性大動脈スーパーネットワークに参画するなど、重症度の高い患者の積極的な受入に努めるとともに、特定集中治療ユニット（ICU）や冠動脈治療ユニット（CCU）の効率的な運用により、急性期医療を提供する体制を整え、重症患者の受入が増加した。
 - 高齢者総合機能評価（CGA）の評価能力の向上に努め、それぞれの患者に適切な治療、早期リハビリテーションを実施し、早期離床、早期退院を図るとともに、退院後のQOLの確保につなげた。
 - 医療連携室等の業務体制を見直し、MSWが早期介入を行うことで、より適切な退院支援を行うとともに、地域の医療機関や訪問看護師との連携を強化し、退院後も継続して質の高い医療、介護を受けられる環境の整備に努めた。
- ⇒ 急性期患者、重症患者の受入体制を強化するとともに、早期リハビリテーションの実施や地域の医療機関等と連携した入退院支援を行うなど、急性期病院としての役割を果たしたことは高く評価できる。

| 項目 | 年 度 計 画 |
|---|---|
| 5 | <p>ウ 救急医療の充実</p> <p>ICUやCCUを効率的に運用し、重症度の高い患者を積極的に受け入れるとともに、救急診療体制の確保や職員の育成に努め、高齢者の救急医療を担う二次救急医療機関として、都民が安心できる救急医療を提供する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 救急隊や地域の医療機関との意見交換を通じて、救急診療体制の検討と改善を行い、より良い体制の確保に努める。 ■平成27年度目標値 救急患者受入数 9,000人以上 ○ 救急症例のカンファレンスや研修体制を充実させ、救急医療における医師や看護師などのレベルアップを図る。 ○ 「救急医療の東京ルール」における役割を確実に果たすとともに、断らない救急のため、より良い体制の確立と積極的な救急患者の受入に努める。 ○ 東京都CCUネットワーク及び東京都脳卒中救急搬送体制に引き続き参加し、急性期患者を積極的に受け入れる。 ■平成27年度目標値 ICU/CCU患者受入数 3,000人 |
| <p>評 定 : S (年度計画を大幅に上回って実施している)</p> | |
| <ul style="list-style-type: none"> ○ 救急診療部における救急科専門医資格を有する医師の増配置や夜間当直責任者を専門当直医とする等の対応により、救急診療体制の強化を図った。 ○ 地域の医療機関との連携体制の構築により、患者の症状に応じた早期の退院を推進し、救急患者受入体制の確保を図った。 ○ 救急外来看護師がトリアージナースの認定を受けるなど、救急医療に関わる職員の育成を行った。 ○ 院内の診療委員会救急部会において、救急外来における滞在時間や受入困難理由などを検証し、救急患者の受入率の向上を図った。 ○ 以上の取組により、救急患者受入数等が増加した。 <p>⇒ 救急受入体制の強化や受入状況の検証等により、救急患者受入数やICU/CCU患者受入数が目標を上回っており、二次救急医療機関及び東京都地域救急医療センターとして都民が安心できる救急医療を提供したことは大いに評価できる。</p> | |

| 項目 | 年 度 計 画 |
|---|--|
| 6 | <p>工 地域連携の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 医療機関への訪問や連携会議、研修会等を通じてセンターの連携医制度をPRし、連携医療機関及び連携医との関係を強化する。 ○ 医療機関・介護施設からの紹介や紹介元医療機関等への返送、地域医療機関等への逆紹介を推進し、診療機能の明確化と前方・後方連携の強化を図る。 <ul style="list-style-type: none"> ■平成27年度目標値 紹介率 80% <li style="padding-left: 40px;">返送・逆紹介率 60% ○ 高額医療機器を活用した画像診断や検査の受入れ、研修会、各診療科主催のセミナー、公開CPC（臨床病理検討会）などを通じて、疾病の早期発見・早期治療に向けた地域連携の強化を図る。 <ul style="list-style-type: none"> ■平成27年度目標値 各診療科セミナー・研修会及び公開CPC開催 10回 ○ 脳卒中や大腿骨頸部骨折などの地域連携クリニカルパスを活用し、患者が退院後も安心して医療を受けられるよう、医療連携体制の強化を図る。 ○ 高齢者が安心して在宅療養を継続できるよう、在宅医療連携病床において患者の受入れを行う。また、東京都在宅難病患者一時入院事業の受託を通じて、都民の安定した療養生活の確保に貢献する。 ○ 退院前合同カンファレンスや認定看護師の講師派遣等を通じて、地域の医療機関や介護施設等との連携を強化するなど、患者が安心して地域で医療等が受けられる環境の確保に努める。 ○ 「クローバーのさと」や地域の関係機関と連携し、患者及び家族に対して医療から介護まで切れ目のないサービスを提供するための具体的な検討や契約締結などを行う。 ○ 二次医療圏（区西北部）における災害拠点病院として、発災時の医療救護活動について、圏内の災害拠点病院や地域の医療機関・介護施設等と協議を行うとともに、必要な体制を整備する。 |
| <p>評 定 : B（年度計画を概ね順調に実施している）</p> | |
| <ul style="list-style-type: none"> ○ 各種セミナーの開催や地域連携NEWSの発行などにより連携医制度の周知に努め、連携医療機関や連携医が増加した。また、板橋区医師会との共催による公開講座、豊島病院との公開CPC、各診療科による医療関係者向けセミナーの開催など、疾病の早期発見・早期治療に向けた地域連携の強化に努めた。 ○ 地域連携クリニカルパスについて、知識の向上を図るための講演会を開催するなどパスの普及に努め、実施件数が大幅に増加した。 ○ 訪問看護ステーションとの間で看護師の交流を行い、協働して褥瘡患者の訪問看護を実施するなど、質の高い在宅療養の実現に貢献した。 <p>⇒ 連携医療機関や連携医を着実に増やし地域連携を強化するとともに、公開CPCや診療科セミナーなどを開催し地域医療の水準の向上に努めたこと、訪問看護師に対する支援を行い、安心して地域で医療を受けられる環境の確保に努めたことは評価できる。</p> | |

オ 安心かつ信頼できる質の高い医療の提供

センターの特性を活かした質の高い医療を提供するとともに、組織的な医療安全対策に取り組み、安心かつ信頼して医療を受けられる体制を強化する。

| 項目 | 年 度 計 画 |
|----|--|
| 7 | <p>オ 安心かつ信頼できる質の高い医療の提供</p> <p>(ア)より質の高い医療の提供</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ もの忘れ外来や骨粗鬆症外来、ロコモ外来など、高齢者特有の疾患に対応した専門外来を充実させ、身体的・精神的に負担の少ない医療を提供する。 ○ オーダーメイド骨粗鬆症治療をさらに推進するとともに、がんをはじめとするその他の疾患に対する個別化医療の推進に向けて取り組む。 <ul style="list-style-type: none"> ■平成 27 年度目標値 オーダーメイド骨粗鬆症診療システム新規エントリー件数 25 例 ○ 薬剤師による入院患者持参薬の確認を引き続き行うとともに、薬剤師を病棟に配置し、投与前の薬剤確認から退院後の服薬指導まで一貫した薬剤管理を行うなど、専門性の高い医療を提供する。 <ul style="list-style-type: none"> ■平成 27 年度目標値 薬剤管理指導業務算定件数 13,000 件 ○ 栄養サポートチーム、退院支援チーム、精神科リエゾンチームをはじめとする専門的知識・技術を有する多職種協働によるチーム医療を推進し、患者の早期回復、重症化予防に取り組む、早期退院につなげる。 ○ 高齢者のうつ病をはじめとした気分障害、妄想性障害などの精神疾患の診断・治療を充実するとともに、近隣医療機関との連携に努める。 ○ 高齢者の特性に合わせた最適な医療を提供するため、研修や勉強会を実施し、医師・看護師・医療技術職の専門能力向上を図る。 ○ 各委員会を中心に、DPC データやクリニカルパスなどの分析及び検証を行い、医療の標準化・効率化を推進することで、医療の質の向上を図る。 ○ 「医療の質の指標（クオリティインディケーター）」を検討・設定し、センターの医療の質の客観的な評価・検証を行う。その結果を反映した改善策を迅速に実行することで、さらなる医療の質・安全性の向上、職員の意識改革につなげる。また、全国自治体病院協議会の「医療の質の評価・公表等推進事業」に参加し、様々な臨床指標を公表し他病院と比較するなど、センターにおける医療の質向上を推進するためのベンチマークとして活用する。 |

評 定 : A (年度計画を上回って実施している)

- 新たに設置したフレイル外来をはじめ、高齢者特有の疾患に対応した専門外来において、専門性の高い医療を提供するとともに、在宅におけるケア継続を支援した。
 - 病棟薬剤業務日誌システムの活用により、業務の効率化を図り、より多くの患者に対して専門性の高い薬物療法を提供した。
 - 栄養管理マニュアルの見直し及び経口摂取のためのチャートの作成を行い、多職種が協働して患者の栄養状態の改善を図った。
 - クリニカルパスの分析及び検証を行い適宜パスを見直すとともに、新規のパスを作成するなど、医療の標準化と効率化を推進した。
- ⇒ フレイル外来の設置や経口摂取のためのチャート作成など、新たな取組を行い、質の高い医療の提供に努めたことは高く評価できる。

| 項目 | 年 度 計 画 |
|---|--|
| 8 | <p>オ 安心かつ信頼できる質の高い医療の提供</p> <p>(イ) 医療安全対策の徹底</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 安全管理委員会を中心に、医療安全に対するリスク・課題の把握と適切な改善策を実施することで、医療安全管理体制の強化を図る。また、研修や講演会等を通じて、職員の医療安全に対する意識の向上に努め、事故を未然に防ぐ体制を確立する。 ○ 転倒、転落及びせん妄などについて、回避・軽減に有効な手法を検証し、フットライトの設置や床ワックスの検討など、高齢者に必要かつ安全な療養環境を整備する。 <ul style="list-style-type: none"> ■平成 27 年度目標値 転倒・転落事故発生率 0.25%以下 ○ 感染防止対策チームを組織する医療機関と定期的な協議を実施するなど、地域ぐるみで感染防止対策に取り組む。 ○ インシデント・アクシデントレポートなどでセンターの状況把握・分析を行うとともに、他の医療機関の取組を参考に、事故発生時に迅速かつ適切な対応を行うことができる体制を強化する。 ○ 感染対策チーム(ICT)によるラウンドを定期的実施して院内感染の情報収集や分析を行い、効果的な院内感染対策を実施する。また、全職員を対象とした研修会や院内感染に関する情報をメールや院内掲示板を活用して職員に周知し、感染防止対策の徹底を図る。 <ul style="list-style-type: none"> ■平成 27 年度目標値 院内感染症対策研修会の参加率 92% |
| <p>評 定 : B (年度計画を概ね順調に実施している)</p> | |
| <ul style="list-style-type: none"> ○ 平成 27 年 10 月より運用が開始された医療事故調査制度へ対応するため、院内事故調査員会設置要綱の策定や死亡時画像診断運用ガイドラインの作成など体制を整備した。また、センター内の研修などにより制度の周知徹底を図った。 ○ 地域の医療機関と感染症防止対策連携カンファレンスを定期的実施するなど、地域全体で感染症防止対策に取り組んだ。また、院内ラウンドの確実な実施や職員研修の徹底など院内感染防止に努めた。 ○ インシデント・アクシデントレポートの分析を行い、再発防止策についてセンター内に周知徹底を図り事故防止に取り組んだ。 <p>⇒ 医療事故調査制度についてセンター内の体制や運用基準の整備など適切な対応に努めた。また、院内ラウンドを着実に実施するなど、感染防止対策を実施した。今後とも医療安全に対する職員の意識向上及び対策の徹底に努めてほしい。</p> | |

(2) 高齢者の健康の維持・増進と活力の向上を目指す研究

| 項目 | 年 度 計 画 |
|----|---|
| 10 | <p>ア トランスレーショナルリサーチの推進（医療と研究の連携）</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ トランスレーショナルリサーチ（TR）研究採択課題の実用化を促進するために、センターとして TR 推進室の支援を行う。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 新たな健康増進法及び次世代の治療法や診断技術に繋がる基礎研究の推進を図るとともに、新規の TR 研究課題の募集及び研究支援を行う。 ・ 病院部門と研究部門双方からの研究活動の取り組みを啓発するために、TR 情報誌の定期発行やセミナー等を開催し、センター内に周知を図る。 <ul style="list-style-type: none"> ■平成 27 年度目標値 TR 研究課題採択数 5 件 <li style="padding-left: 100px;">TR 情報誌発行回数 4 回 ○ 病院部門の職員が論文発表や研究活動を効率的に促進できるよう、支援体制を整える。 <ul style="list-style-type: none"> ■平成 27 年度目標値 研究支援セミナー開催数 3 回 ○ TOBIRA で開催する研究交流フォーラム等を通じて、センターの研究内容や研究成果を広く多方面に情報発信するとともに、外部機関とのネットワークを構築し、共同・受託研究につなげる取組を推進する。 <ul style="list-style-type: none"> ■平成 27 年度目標値 TOBIRA 研究発表数（講演、ポスター発表） 8 件 <li style="padding-left: 100px;">外部資金獲得件数 230 件 <li style="padding-left: 100px;">外部資金獲得金額（研究員一人あたり） 6,500 千円 <li style="padding-left: 100px;">共同・受託研究等実施件数（受託事業含む） 65 件 ○ 東京都、板橋区、医師会等と認知症の医療サービス強化と地域包括ケアシステム構築に関する政策科学的研究を引き続き遂行する。 ○ 精神科と連携し、うつ病、妄想性障害など、高齢者の難治性精神疾患の病態解明と治療法の開発に関する臨床研究を引き続き遂行する。 ○ PET 部門と放射線診断部門が連携し、認知症診断及びがん診断に有効な候補化合物を絞り込み、臨床応用に向けた評価を行う。 ○ 高齢者の頻尿や尿失禁の防止に最も効果的な非侵襲的皮膚刺激手法を見出し、頻尿・失禁患者に対する有用性を検証する。 ○ 病理部と連携し、認知症の超早期診断に寄与する可能性がある画像バイオマーカー候補分子（タウイメージング）を選択し、その診断効果を評価する。 ○ 外部有識者からなる外部評価委員会において、学術的な獨創性・新規性や計画実現の可能性及び研究の継続の可否についての評価を行う。 ○ センター内部の委員からなる内部評価委員会において、研究の計画・成果及び継続、進行管理等についての評価を行う。 |

評 定 : A (年度計画を上回って実施している)

- トランスレーショナルリサーチ研究課題の成果として、高齢者の頻尿を皮膚刺激によって制御する「過活動膀胱抑制器具」が医療機器として承認され販売を開始したほか、体カ・筋肉量等を評価する「サルコペニア・チェックシステム」を開発し、フレイル外来に導入した。
 - 病院と研究所とが連携して症例収集、診断法の研究を行い、認知症の原因疾患の一つであるエオジン好性核内封入体病に関して、皮膚生検による判別診断の有用性について学会報告を行った。
 - 乳がんの早期発見に有効なPET薬剤について、製造試験を完了し、センターにおける臨床応用への準備が着実に進んだ。
- ⇒ 病院と研究所の連携した研究により、臨床応用に結びつく成果が出てきたことは高く評価できる。
今後も、更なる研究の進展と得られた成果の普及還元により、より一層努めてほしい。

| 項目 | 年 度 計 画 |
|----|---|
| 11 | <p>イ 高齢者に特有な疾患と生活機能障害を克服するための研究</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 幹細胞移植による高齢者の心疾患治療の実現に向けた課題を明らかにし、基礎・臨床の両面から克服すべき課題に取り組む。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 心血管組織由来細胞および幹細胞を用いた機能解析を行い、疾患モデル構築に有用なマーカー分子を選別する。 ・ 新たに同定した老化指標分子マーカーによる幹細胞の品質管理、安全性評価を行い、心疾患モデルマウス開発へ応用する研究を行う。 ○ 胃がん、大腸がん、膵がん、乳がん、口腔内がん等の発生機序や病態をテロメア長との関係から解析し、診断、予防及び治療への有用性を評価する。 ○ 認知症の発症機構の解析、PET リガンドを含む診断薬や、記憶障害改善治療の開発に貢献する。認知症の進行度の診断指標となり得る髄液バイオマーカー候補分子を絞り込み高感度定量法の開発を行う。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 認知症症例の病理検体を用いて、マイクロ RNA・エクソソームに焦点を当てたバイオマーカー探索を行う。 ・ シトルリン化タンパク質を特異的、かつ高感度に検出する抗体を作成するとともに、取得した各モノクローナル抗体の特異性を評価するシステムを構築する。 ・ 脳内の分子・細胞機構に焦点を当てた記憶障害に関与する細胞内伝達系の研究を行うとともに、記憶障害に関与する候補分子を絞り込み、記憶障害モデルマウスを作成する。 ・ 可溶性βアミロイドが引き起こす細胞内情報伝達系の変化を解析し、神経変性への道筋を分子レベルで解析する。 ・ 脳内コリン作動系活性化のメカニズムの解析を行う。 ・ 大脳基底核起因病態モデルマウスを電気生理的に解析する。 ・ アルツハイマー病における APP（アミロイド前駆体タンパク質）に特有の糖鎖構造、及び、それを形成する糖転移酵素の解析をする。 ○ プロテオーム解析により、動脈硬化、糖尿病、健康長寿に関連するタンパク質とその分子修飾を解明し、疾患・健康長寿バイオマーカーを探索する。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 二次元電気泳動法による動脈中膜変性組織のプロテオーム解析を行う。 ・ 糖尿病患者と糖尿病モデルマウスの血液のグライコプロテオミクス解析を行い、共通する変化を抽出する。 ・ 長寿モデルと考えられる 105 歳以上の超百寿者血漿サンプルを用い、グライコプロテオミクス解析（糖タンパク質のプロテオーム解析）を行う。 ○ サルコペニア及び神経筋難病に焦点を当て、早期診断のバイオマーカーの解析を進め、運動機能低下の予防法や治療法開発の基盤研究を行う。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 運動神経細胞や筋細胞株を樹立し、機能の維持機構及び代謝調節の分子機構を解析する。 ・ モデルマウスや剖検例のゲノム及びエクソーム解析によって、新規の骨粗鬆症や高齢者疾患に関連する遺伝子を探索する。 ○ 加速度計付身体活動測定器で測定された日常身体活動と老年症候群との関係について、健康長寿に最適な生活習慣を解明する。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 高齢者における日常身体活動と、体温、睡眠、メンタルヘルス（うつ病）および生活機能（自立度・QOL）との関係を統計学的手法を用いて解析し、普及方法を検討する。 ○ 認知症の早期診断法・発症予測法を確立し、客観的な介入効果判定法も開発する。 <ul style="list-style-type: none"> ・ フッ素 18 標識アミロイド診断薬に関する臨床研究を開始する。 |

- ・ 健常老年者（100名）のPETによる追跡を継続する。
- ・ レビー小体病とタウオパチー症例におけるPET画像の蓄積と解析を行う。
- アミロイドイメージングに加えて、認知機能と関連が深いとされる神経伝達機能や神経可塑性・神経保護作用に着目したトレーサー（病態を画像化する際に体内に取り込んで追跡する物質）の新規開発及び導入を行い、認知症やうつ病の病態生理を解明する。
 - ・ 神経変性疾患に対するグルタミン酸受容体サブタイプ1 (ITMM)の臨床研究を実施する。
 - ・ タウオパチーに対する新規トレーサーの導入と臨床使用承認を経て初期評価を行う。
- がん診断のためのトレーサーの新規開発及び導入を行い、がんの病態生理の解明に貢献する。
 - ・ 臨床応用を見据えた18F-4DST (4'-thiothymidine) 誘導体化合物の選択と初期評価試験を行う。
- 女性ホルモン（エストロゲン）のフッ素18標識体(FES)の臨床使用承認を経て、乳がんの病態生理研究を進める。また、エストロゲン受容体のβサブタイプに着目したPETリガンドを開発するため、新規化合物のデザインと合成、基礎評価を行う。

評 定 : A (年度計画を上回って実施している)

- PET薬剤FDG及びPET21を用いたPET解析から、アルツハイマー病とレビー小体型認知症を画像識別することに成功した。
 - 膵臓がん病変部周辺の形態異常が見られない膵管組織や、悪性化が観察される以前の膀胱腫瘍において、テロメアが短縮していることを確認した。この結果から、がん化や悪性化のリスク評価としてテロメア長の測定が有効である可能性が示された。
 - マウスを用いた実験で、既存の認知症治療薬とシロスタゾールの二種について、それぞれの単独投与では記憶力回復効果が現れない低容量であっても、両者を併用することにより、低下した記憶力が回復する効果が確認された。
- ⇒ センターの重点医療である血管病、高齢者がん及び認知症に関する基礎研究について、研究を着実に推進しており、臨床応用や実用化につながる成果が現れてきたことは高く評価できる。

| 項目 | 年 度 計 画 |
|----|---|
| 12 | <p>ウ 活気ある地域社会を支え、長寿を目指す研究</p> <p>(ア) 安心して生活するための社会環境づくりへの貢献</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 地域高齢者の社会参加活動や社会貢献活動を促進するコーディネート・支援システムのモデル開発・評価に向けた取組を推進する。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 世代間交流活動やソーシャル・キャピタル(SC) について多面的に行った検証結果を基に、社会参加や社会的孤立の社会経済的な側面からの評価を行う。 ・ 都内及び都内近郊のコホートにおいて、高齢者の社会的孤立に関する調査・予防、疫学研究を継続し、新たな社会参加プログラムを提案する。 ○ 地域高齢者における虚弱化のプロセスの解明に関する縦断研究を継続するとともに、その成果を公表していく。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 縦断研究データに基づいて虚弱化の類型化を試み、それぞれの関連要因を明らかにする。 ・ モデル地域における虚弱化予防の実証実験結果を踏まえ、健康寿命を支える地域社会システムを提案する。 ○ 認知症のQOL維持・改善を目指した介入研究を実施するとともに、サルコペニック・オベシティ(SO)と認知機能との関連性を検討する。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 認知症総合アセスメント(DASC)を含む包括的尺度を用いて、認知症初期支援体制の有用性を縦断的に評価する。 ・ SO選定基準に基づく地域在住SO高齢者を対象に、骨格筋量の上昇、体脂肪の減少、認知機能改善を目的としたRCT(無作為比較試験)介入研究を実施する。 ○ 生活機能低下を防ぐリハビリテーション、看護技術、心理社会的支援、生活指導、権利擁護の実態を調査し、研究の焦点を絞る。 ○ 終末期の意志決定支援プログラム「ライフデザインノート」を用いた実践的研究の試行を通じ、汎用性向上に向けた課題や、制度上の課題を分析する。 ○ 福祉施設での良質な看取りの実現に向け、「反照的習熟プログラム」の効果検証を行いつつ、実践者への還元を促進する。 ○ 地域包括ケアシステムの導入に係る課題とその対応策を検討するため、地域単位で医療・介護ニーズを分析・検討する。 <p>(イ) 災害時における高齢者への支援</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 被災地のニーズを把握し、仮設住宅や復興住宅などに居住する居住高齢者を対象とした介護予防講座の実施や、福祉サービスの再建に関わっている専門職への支援活動を継続する。 ・ 都内介護サービス事業者への防災対策調査から得られたデータをもとに作成された災害時の対応に関する報告書を行政機関などに配布する。 |

評 定 : B (年度計画を概ね順調に実施している)

- 高齢者の世代間交流についての長期介入研究から、社会貢献活動が心身社会的機能を維持、改善することを明らかにし、高齢者ボランティアの支援のためのコーディネートマニュアルを作成し、広く社会に還元した。
 - DASC-21 (認知症評価シート) を用いた認知症初期支援プログラムのテキストの作成や、全国の認知症疾患医療センターの実態調査に基づく国への提言を行った。
 - 介入研究の結果、サルコペニア症候群に肥満が合併した症例であるサルコペニック・オベシティ (SO) の改善には、運動に栄養補充を加えた包括的指導が有効であることが判明した。
- ⇒ 長期介入研究の結果、高齢者の社会参加活動等を促進するシステムのモデル開発や評価を着実に進めたことは評価できる。
今後はさらに研究を進め、高齢者が安心して生活するための環境づくりに貢献してほしい。

| 項目 | 年 度 計 画 |
|----|--|
| 13 | <p>工 先進的な老化研究の展開・老年学研究におけるリーダーシップの発揮</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 動物、線虫、細胞等を用い、寿命や老化速度の調節、老化関連疾患に関わる遺伝子探索とその機能を解明し、老化制御・健康増進に資する物質を同定する。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 寿命や老化速度の調節に関わる老化関連遺伝子を探索する。 ・ 食品からの抗酸化物質の摂取が老化制御に有効かを調べるとともに、水素分子の作用機序の解明及びその投与の有効性について検討する。 ○ ミトコンドリア病に対するピルビン酸ナトリウム療法の臨床試験を実施し、成人における安全性を確認すると共に、患者への有効性の評価を行う。 ○ 老化関連疾患の病態解明を目指し、RNA・タンパク質の発現及びタンパク質修飾の制御機構と生理機能を解明する。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 廃用性および脱神経による筋萎縮、筋ジストロフィー症などの筋疾患モデルマウスと自然老化マウスにおける糖鎖構造を比較し、病態との関連性を解析する。 ・ 老化関連疾患を多発し短寿命となる遺伝子異常をもつ klotho マウスにおける糖タンパク質の糖鎖構造の変化と、klotho タンパク質の機能変化との関連性について解析する。 ・ 長寿モデルと考えられる 105 歳以上の超百寿者血漿サンプルを用い、グライコプロテオミクス解析（糖タンパク質のプロテオーム解析）を行う。（再掲） ・ ミトコンドリア機能の指標となるバイオマーカーの探索を継続して行う。 ○ 高齢者剖検例における全エクソン領域機能的（タンパク質アミノ酸置換を伴う 24 万個の）遺伝子多型の解析を行い、アルツハイマー病、パーキンソン病及び骨粗鬆症などの高齢者に特有の疾患の原因遺伝子の解明を目指す。 ○ 日本神経科学ブレインネットワークの拠点として、海外の研究機関等と共同で老化機構・アルツハイマー病・パーキンソン病研究を進め、高齢者ブレインバンクの充実を継続して図る。 <ul style="list-style-type: none"> ・ Michael J Fox 財団の国際パーキンソン病研究へ参画するなど、海外との共同研究をさらに展開していく。 ○ 病院と研究所が一体であるセンターの独自性を発揮し、ブレインバンクを基盤に髄液、血清等を組合せたオリジナリティの高い、世界にも類のない高齢者コホートリソースを構築し、学術研究と臨床研究の発展に貢献する。 <ul style="list-style-type: none"> ■平成 27 年度目標値 高齢者ブレインバンク新規登録数 35 例 バイオリソース共同研究数（高齢者ブレインバンク含む）50 件 ○ 診断確定した消化管リソースの蓄積を継続して実施し、新たなバイオマーカーの探索や既存のバイオマーカーの組合せによる新規診断法の確立を目指す。 <ul style="list-style-type: none"> ・ レビー小体病の臨床診断のための外科材料や皮膚生検材料の有用性の検討をする。また、新しい認知症であるエオジン好性核内封入体病の皮膚生検材料の有用性を検討する。 ○ アルツハイマー病克服に向けた国際研究に参画するなど、国内外の多くの施設と連携し、アミロイドメーキングに関する研究や、世界で開発が始まったタウイメーキングに関する研究を推進する。 ○ 国内外の学会等において、研究成果の発表を着実にを行うとともに、学会役員としての活動や学会誌の編集活動等により、老年学に関連する学会運営にも積極的に関与する。 <ul style="list-style-type: none"> ■平成 27 年度目標値 論文発表数 583 件 学会発表数 832 件 |

- 科学研究費助成事業など、競争的研究資金への積極的な応募により、独創的・先駆的な研究を実施する。
■平成 27 年度目標値 科研費新規採択率 39%
- 民間企業や大学、自治体等と連携し、老年学における基礎・応用・開発研究に積極的に取り組む。
- 老年学関連の国際学会等での研究成果の発表や海外研究機関等との共同研究を促進するなど、国際交流を図る。
- 連携大学院等から若手研究者を積極的に受け入れるとともに、指導やセミナーを通じて、次世代の中核を担う若手研究者の養成を図る。

評 定 : S (年度計画を大幅に上回って実施している)

- 指定難病である福山型先天性筋ジストロフィー症の原因となる3つの遺伝子を同定するとともに、糖鎖構造異常が本疾患の発症原因となることを解明した。
 - *l*-マンノース型糖鎖の異常が指定難病である網膜色素変性症の発症の一因となる事を解明した。
 - 高齢者ブレインバンクの新規登録数が目標を上回り、国内外の医療機関とネットワークを構築して、病理組織のリソースセンターとして国内外の研究の発展に貢献している。
 - 日本老年医学会の公式英文誌において健康長寿医療センターが特集され、論文13編が掲載されるなど、研究成果の発表を積極的に行った。
- ⇒ 老化研究や老年学研究については、中期計画及び年度計画を踏まえ着実に実施し、難病の発症メカニズムを解明するなど、今後の診断・治療法の開発への活用が期待される成果を上げた。さらに、高齢者ブレインバンクについても、リソースを着実に蓄積し、広く研究に活用されていることは大いに評価できる。

| 項目 | 年 度 計 画 | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|--------------|--------------|---------|------|---------|--|------------|-----|--|-------|--|----------|-----|--|------|
| 14 | <p>才 研究成果・知的財産の活用</p> <p>○ 臨床と研究の両分野が連携できるメリットを活かすため、健康長寿いきいき講座と老年学公開講座を統合し、「東京都健康長寿医療センター老年学・老年医学公開講座」を実施する。また、将来の科学者となりうる中・高校生を対象とする、サイエンスカフェを新たに実施する。</p> <table border="0" style="margin-left: 20px;"> <tr> <td>■平成 27 年度目標値</td> <td>老年学・老年医学公開講座</td> <td>4 回</td> <td>出席者数</td> <td>2,500 人</td> </tr> <tr> <td></td> <td>科学技術週間参加行事</td> <td>1 回</td> <td></td> <td>150 人</td> </tr> <tr> <td></td> <td>サイエンスカフェ</td> <td>1 回</td> <td></td> <td>30 人</td> </tr> </table> <p>○ ホームページを活用し、研究所の活動や研究内容及び成果を都民、研究者、マスコミ関係者などに広く普及させるとともに、外部機関との共同研究等も視野に入れ、研究シーズ集を引き続き公開する。</p> <p>■平成 27 年度目標値 ホームページアクセス数（研究所トップページ） 55,000 件</p> <p>○ 研究所の広報誌「研究所NEWS」や各種講演集及び出版物を通じて、研究所の活動や研究成果を普及させる。</p> <p>○ 国や地方自治体、その他の公共団体の審議会等へ参加し、政策提言を通じて、研究成果の社会還元に努める。</p> <p>○ 研究成果のさらなる特許取得や実用化を目指すとともに、先行特許等の調査や特許事務所との調整等、保有特許を適切に管理し、権利化による費用対効果を再検討する。</p> <p>■平成 27 年度目標値 特許新規申請数 2 件</p> <p>○ 介護予防主任運動指導員養成事業の運営を通じて、センターが有する介護予防のノウハウを普及させるとともに、指導員資格取得後のフォローアップ研修の充実や自治体などへの広報を行う。</p> | ■平成 27 年度目標値 | 老年学・老年医学公開講座 | 4 回 | 出席者数 | 2,500 人 | | 科学技術週間参加行事 | 1 回 | | 150 人 | | サイエンスカフェ | 1 回 | | 30 人 |
| ■平成 27 年度目標値 | 老年学・老年医学公開講座 | 4 回 | 出席者数 | 2,500 人 | | | | | | | | | | | | |
| | 科学技術週間参加行事 | 1 回 | | 150 人 | | | | | | | | | | | | |
| | サイエンスカフェ | 1 回 | | 30 人 | | | | | | | | | | | | |
| <p>評 定 ： B（年度計画を概ね順調に実施している）</p> | | | | | | | | | | | | | | | | |
| <p>○ 定期的な講演会の開催や研究所NEWSの発行など、研究所の研究成果や取組について、都民へ普及を図った。</p> <p>○ 新たにサイエンスカフェを実施し、研究者と一緒に実験をするなど、科学に興味のある中学生と体験型の交流を図った。</p> <p>○ 第 29 回日本老年学会総会（合同大会）の会長を理事長が務め、センター職員も多数演題発表を行ったほか、国や都の審議会等に委員として参加し、研究成果の政策還元積極的に取り組んだ。</p> <p>⇒ 新しい取組としてサイエンスカフェを実施し、次代の研究を担う若年層に対し啓発を行ったこと、第 29 回日本老年学会総会において理事長が会長を務めるとともにセンターを挙げて学会の開催に携わり、老年学研究分野の進展に貢献したことは評価できる。</p> <p>今後も、様々な媒体を効果的に活用し、研究成果の普及や社会還元に向けてほしい。</p> | | | | | | | | | | | | | | | | |

(3) 高齢者の医療と介護を支える専門人材の育成

都における高齢者医療及び研究の拠点として、今後も安定的かつ継続的に都民サービスを提供していくため、センター職員の計画的な採用及び専門性の向上を図る。また、高齢者の医療と介護を支える仕組みの構築に資するため、センター職員だけではなく、次世代の高齢者医療・研究を担う人材や地域の医療・介護を支える人材の育成を進める。

| 項目 | 年 度 計 画 |
|----|---|
| 15 | <p>ア センター職員の確保・育成</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 都職員の派遣解消計画を踏まえ、就職説明会やホームページを通じてセンターの特長をPRし、計画的に固有職員の採用を進めるとともに、即戦力となる経験者採用についても積極的に実施する。 ○ 医療専門職の専門的能力向上を図るため、認定医や専門医、認定看護師などの資格取得を支援し、人材育成につなげていく。 ○ 研修体制の充実や適切な人事配置などにより、病院特有の事務や経営に強い事務職員を組織的に育成する。 ○ センターの特長を活かした研修や実習を充実させることで、臨床研修医、看護師及び医療専門職に魅力ある職場環境を示し、人材の確保と定着を図る。 ○ センターの理念や必要とする職員像に基づく研修計画を策定し、体系的な人材育成カリキュラムを実践する。 ○ 職員の業務に対する意識や職場環境などを把握するため「職員アンケート」を実施し、人材育成計画等に活用する。 <p>イ 次代を担う医療従事者及び研究者の養成</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 高齢者医療や研究におけるセンターの資源を活用し、センターの特長を活かした指導・育成体制を充実させることで、臨床研修医や看護師、医療専門職、研究職を目指す学生などの積極的な受入れ及び育成に貢献する。 ○ 医師や医療専門職等の講師派遣を通じて、高齢者医療への理解促進と次世代の医療従事者及び研究者の人材育成に貢献する。 ○ 連携大学院からの学生や大学・研究機関からの研究者を積極的に受け入れ、老年学・老年医学を担う研究者の育成に取り組む。 <p>ウ 地域の医療・介護を支える人材の育成</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 他病院から看護師の受入れや看護地域セミナーの開催、認定看護師及び専門看護師による専門医療相談窓口「たんぼぼ」の活動を通じて、高齢者の在宅療養を支える人材育成に貢献する。 ○ 介護予防主任運動指導員等の養成事業を継続して行い、介護予防の普及と人材育成を促進する。 ○ 病院と研究所の一体化のメリットを活かし、クローバーのさとの介護老人保健施設・訪問看護部門などとの連携体制の構築を進める。 |

評 定 : B (年度計画を概ね順調に実施している)

- 看護師の採用について、就職説明会への参加や看護学生のインターンシップ研修を行うなど、積極的な採用活動を行うとともに、即戦力として経験者の雇用にも努めた。また、医師事務作業補助者を増員し、医師の負担軽減を図った。
 - 専門的能力向上を図るため、認定医師等資格取得の支援や認定看護師の養成等を計画的に行なった。
 - 介護職ができる医療行為について、高齢者の特徴、ケア方法等を踏まえて解説した書籍を発行し、地域の介護人材の育成に貢献した。
 - 医学生、研修医を対象とした高齢者医学研究セミナーの開催や連携大学院からの学生の受入、外国人医師臨床修練の受入など次代の高齢者医療・研究を担う人材の育成に貢献した。
- ⇒ 介護人材向けの書籍を新たに発行するなど、センターの専門性を活かした人材育成に取り組んでいることは評価できる。
今後も、地域の医療・介護人材の育成にさらに取り組んでほしい。

2 業務運営の改善及び効率化に関する事項

経営戦略会議等において、地方独立行政法人としての特長を活かした業務改善や効率化に積極的に取り組むとともに、運営協議会などの外部からの意見を取り入れ、経営の透明性・健全性を確保し、組織体制の強化を図る。

| 項目 | 年 度 計 画 |
|---|---|
| 16 | <p>(1)地方独立行政法人の特性を活かした業務の改善・効率化</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 効率的かつ効果的な業務運営を実施するため、経営戦略会議や病院運営会議、研究推進会議等で迅速かつ十分な議論を行い、体制の適時の見直しや弾力的な予算執行を図る。 ○ 人事異動基準や人事考課制度を適切に運用し、職員の適性或能力を踏まえた人事配置による職員のモチベーション向上と組織の活性化を図る。 ○ 職員提案制度を継続し、全職員が主体的にセンター運営や職務について発言する機会を設けるとともに、改善活動を促進する職場風土を醸成する。 <p>■平成 27 年度目標値 職員提案制度 提案数 20 件</p> |
| <p>評 定 : A (年度計画を上回って実施している)</p> | |
| <ul style="list-style-type: none"> ○ 診療報酬改定などを踏まえた今後の病院運営について検討を行うため、ワーキンググループを立ち上げ、医療環境の変化に対応すべく、データに基づく戦略の策定に取り組んだ。 ○ 職員提案制度については、テーマを設けるなど工夫し、提案件数が大幅に増加した。また、受賞した提案の実行により、患者への説明が効率的かつ分かりやすく行えるなどの効果が得られるとともに、組織の活性化に繋がった。 ○ 職員のモチベーションをさらに向上させるため、新たに職員表彰制度を導入した。 <p>⇒ 病院運営に関するワーキンググループの設置や職員表彰制度の導入など、業務運営の改善及び効率化に積極的に取り組んだことは高く評価できる。</p> | |

| 項目 | 年 度 計 画 |
|--|---|
| 17 | <p>(2)適切なセンター運営を行うための体制の強化</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 会計事務を中心とした監査から法人の業務活動全般にわたって監査を行うよう規程等の見直しをした内部監査制度のもと 27 年度も継続して実施し、監査報告書において改善事項とされた項目については必要な改善を行っていく。また、職員の監査スキルの向上を図り、実効性を担保していく。 ○ 会計監査人監査による改善事項については、速やかに対応する。また、非常勤監事、会計監査人と連携を強化し、法人運営の適正を確保する。 ○ 組織や職員の業務の標準化及び定量化を図るため、業務マニュアルを引き続き見直す。 ○ 運営協議会や研究所外部評価委員会などを通じて外部からの意見や評価を把握し、センター運営や業務改善に反映させる。 ○ 財務諸表など各種実績をホームページに速やかに掲載し、法人運営に係る情報公開と透明性を確保する。 ■平成 27 年度目標値 ホームページアクセス数（法人トップページ） 81,000 件 ○ 全職員を対象とした悉皆研修の実施や汚職等非行防止月間を活用して、センター職員としてのコンプライアンス（法令遵守）を徹底する。 ○ 倫理委員会を適正に運用し、高齢者医療や研究に携わる者の倫理の徹底を図る。 ○ 文部科学省の「研究機関における公的研究費の管理・監査のガイドライン（実施基準）」の改定を受け、26 年度に策定した公的研究費の新たな不正使用防止対策についてセンターを挙げて取り組むことで、研究費の適正な運営・管理を強化していく。 |
| 評 定 : B（年度計画を概ね順調に実施している） | |
| <ul style="list-style-type: none"> ○ 病院機能評価の受審に向け、「機能評価委員会」を設置して、各種マニュアルの更新を行うなど、病院を挙げて準備に取り組んだ。 ○ 研究費の適正な執行のため、研修会の開催や、モニタリングにより、不正使用が発生するリスクを洗い出し、洗い出したリスクの内、特に課題と考えられた点について監査を実施するなど、不正使用の防止に努めた。 <p>⇒ 会計監査人監査や内部監査制度等により、随時事務の改善を図るとともに、研究費の不正使用防止のため真摯に取り組んだことは評価できる。今後も、研究費をはじめとした不正防止対策など、内部管理の強化に継続して取り組んでほしい。</p> | |

3 財務内容の改善に関する事項

より安定した経営基盤を確立するため、経営分析及び経営管理を徹底し、安定した収入の確保と費用の削減に努めるなど、財務体質を強化する。

| 項目 | 年 度 計 画 |
|----|---|
| 18 | <p>(1)収入の確保</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 退院支援や後方連携の強化、クリニカルパスの活用などにより、診療報酬改定に対応した平均在院日数の短縮を図り、収入を確保する。 <ul style="list-style-type: none"> ■平成 27 年度目標値 平均在院日数（病院全体） 15.0 日 平均在院日数（一般病棟） 14.0 日 平均在院日数（緩和ケア病棟） - 日 平均在院日数（精神科病棟） 38.0 日 ○ 前方連携の強化、救急患者の受入れなどにより、新規患者の確保に努める。また、後方病院との連携・提携を強化することで平均在院日数の短縮に努める。さらに、病床の一元管理や入退院管理を徹底することで病床利用率の向上を図り、安定的な収入確保を図る。 ○ 有料個室の有料使用率向上に向け、これまでの使用状況を分析するなどし、配置や料金体系を見直しを検討する。 <ul style="list-style-type: none"> ■平成 27 年度目標値 新入院患者数 10,500 人 初診料算定患者数 15,000 人 病床利用率（病院全体） 86.0% ○ センターが請求できる診療費等について確実に請求を行うとともに、新たな施設基準の取得を積極的に行う。また、平成 28 年度に実施される診療報酬改定に向けた体制整備を行う。 ○ DPC データの分析を強化するとともに、保険請求における請求漏れや査定を減らすため、各委員会においてセンター全体の改善策を検討し、確実な収入につなげる。 <ul style="list-style-type: none"> ■平成 27 年度目標値 査定率 0.3%以下 ○ 「未収金管理要綱」に基づき、未収金の発生防止に努めるとともに、発生した未収金については警察 OB を活用した出張回収や督促などにより、早期回収に努める。また、過年度未収金については、回収可能性の高い債権から回収を行うなど、積極的かつ効率的な回収を行う。 <ul style="list-style-type: none"> ■平成 27 年度目標値 未収金率 1.00%以下 ○ 未収金の現状を分析し、センターに適した未収金の発生防止策、回収策の検討を行う。また、未収金の回収に複数人に対応するために必要な人材育成を積極的に行う。 ○ 文部科学省や厚生労働省などの研究費補助金への応募や共同研究・受託研究を推進し、外部研究資金の積極的な獲得に努める。 <ul style="list-style-type: none"> ■平成 27 年度目標値 外部資金獲得件数（再掲） 230 件 外部資金獲得金額（研究員一人あたり）（再掲） 6,500 千円 共同・受託研究等実施件数（受託事業含む）（再掲） 65 件 科研費新規採択率（再掲） 39% ○ 共同研究等を視野に入れた研究シーズ集やホームページなどを活用して、研究内容の積極的な広報活動を行う。また、特許やライセンス契約などの知的財産を活用し、研究成果の実用化を図る。 |

評 定 : A (年度計画を上回って実施している)

- 救急診療体制の強化による救急患者の積極的な受入れなどにより、新規患者はさらに増加した。また、連携医療機関との連携強化や適切な退院支援の実施に取組み、平均在院日数の短縮を図りながらも、新入院患者の確保に努めたことにより、病床利用率は向上し、目標を達成した。
- 保険請求の漏れや査定を減らすため、外部講師を招き、全職員を対象に研修会を開催するなど、保険請求の適正化に取り組んだ。
- ⇒ 新入院患者の確保及び病床利用率の向上のため、積極的な取組を行い、昨年度の実績を上回るとともに、目標を達成したほか、新たな施設基準を取得し、収入の確保に努めたことは高く評価できる。

| 項目 | 年 度 計 画 |
|--|--|
| 19 | <p>(2)コスト管理の体制強化</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 各部門システムやデータウェアハウスから得られる診療情報と月次決算などの財務情報を合わせて経営分析を行い、収支状況の把握と改善に向けた取組を迅速に行う。 ○ 各種会議等を通じて、センターの実績や経営に関する情報を共有するとともに、職員一人ひとりが経営改善やコスト意識を持ち、業務を遂行できる環境と体制を確保し、コスト削減につなげる。 ○ 原価計算ワーキンググループにおいて、医師を中心に配賦ルールを見直すなどし、病院部門における原価計算の精度向上を図り、適切なコスト管理に向け準備を進める。 ○ 診療や経営に関する目標を部門別に設定し、目標達成に向けた取組を確実に実施する。また、中間期及び期末ヒアリングで進行管理を行うとともに、課題の洗い出しと共有を行い、センターが一体となって課題の解決や経営改善に取り組む。 ○ 予算執行管理を適切に行うため、予算配分の方法等について検討を行う。 ○ 契約事務を見直し、少額案件に関する事務手続きの簡素化等を行い、事務コストの削減を図る。 ○ 希望制指名競争入札を活用し、実施案件の拡大を図ることで、契約履行の確実性を確保し、コスト削減に努める。 ○ 診療材料、薬剤管理などのSPD（物流・在庫）業務について委託契約を更新し、効率的な業務運営を行っていく。特に、手術室で使用する材料についての的確に管理し、コストの適正化を図る。 ○ 材料費については、必要性や安全性、使用実績等を考慮しながら、ベンチマークシステムを用いて他病院との比較を行い、さらなる縮減に取り組む。 ○ 後発医薬品の採用を推進するとともに、ベンチマークシステムを一層活用し、医薬品費の削減につなげる。 <ul style="list-style-type: none"> ■平成 27 年度目標値 後発医薬品使用割合 70% ○ 医療機器等の購入については、センター内の保有状況、稼働目標やランニングコストなどの費用対効果を明確にしたうえで備品等整備委員会において購入を決定し、効果的な運用とコスト削減を図る。 |
| <p>評 定 : A (年度計画を上回って実施している)</p> | |
| <ul style="list-style-type: none"> ○ 原価計算の配賦ルールの見直しに取組み、原価計算結果の精度向上を図った。 ○ 後発医薬品の採用を促進し、医薬品費について、前年度より大きな縮減効果が得られた。 ○ 手術室で使用する材料について、SPD受託業者と運用方法を定め、効率的な材料管理に努めた。 <p>⇒ コストの縮減に向けて、原価計算の精度向上、後発医薬品の採用促進、材料管理の効率化など様々な取組を行い、効果を上げた点は高く評価できる。</p> | |

9 その他業務運営に関する重要事項（センター運営におけるリスク管理）

経営戦略会議等において、想定されるリスクの分析及び評価を引き続き行うとともに、理事長をトップとしたセンター全体のリスクマネジメント体制を適切に運用し、安定かつ信頼されるセンター運営を行う。

| 項目 | 年 度 計 画 |
|---|---|
| 20 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 個人情報の保護及び情報公開については、法令及びセンターの要綱に基づき、適切な管理及び事務を行う。 ○ 全職員を対象とした個人情報保護研修を実施し、職員の意識向上による管理の徹底を図る。 ○ カルテ等の診療情報については、法令等に基づき適切な管理を行うとともに、インフォームド・コンセントの理念とセンターの指針に基づき、診療情報の提供を行う。 ○ センターで稼働しているシステムの評価・分析を行い、ネットワークセキュリティなどの情報基盤を強化することで、システムによる情報漏えいを防止する。 ○ 全職員を対象とした情報セキュリティ研修を実施し、情報セキュリティに対する職員の意識向上と管理方法の徹底を図り、事故を未然に防止する。 ■平成 27 年度目標値 情報セキュリティ研修参加率 100% ○ 超過勤務時間の管理を適切に行うとともに、健康診断の受診促進やメンタルヘルス研修等の充実を図り、安全衛生委員会を中心に快適で安全な職場環境を整備する。 ○ セクシュアルハラスメントやパワーハラスメント、メンタルヘルスなどの相談窓口を職員に周知徹底するとともに、内部通報制度を適切に運用し、職員が働きやすい健全かつ安全な職場環境を整備する。 ○ 全職員を対象とした「職員アンケート」を実施し、職員の意識や意向をセンターの運営や職場環境の改善に活用する。 ○ 二次医療圏（区西北部）における災害拠点病院として必要な体制を整備するとともに、地域の医療機関との役割分担を明確にし、発災時に迅速な対応を行うための体制を整備する。 ○ 大規模災害や新型インフルエンザ発生等を想定した事業継続計画（BCP）や危機管理マニュアル等に基づき、防災・医薬品等の備蓄及び防災訓練等を実施するなど、危機管理体制の更なる強化を図る。 |
| <p>評 定 : B（年度計画を概ね順調に実施している）</p> | |
| <ul style="list-style-type: none"> ○ 情報漏洩防止のため、情報セキュリティ研修について、時間設定を工夫するなど、参加しやすい環境作りに努めた。 ○ 良好な職場環境の確保のため、仕事と育児及び介護との両立の支援を目的とした時差勤務制度の導入や、職員アンケート結果による研修方法の見直しなどに取り組んだ。 <p>⇒ 情報漏洩防止への取組や時差勤務制度の実施など、リスク管理及び良好な職場環境の確保のため、着実な取組を実施したことは評価できる。引き続き、超過勤務縮減の取組や、マイナンバーをはじめとした個人情報等について適切な管理を行って事故防止に努めるなど、職員の満足度が高く安心して働ける職場環境づくり及びリスク管理に取り組んでほしい。</p> | |